

附属農場講演会・附属農場見学会

若山 晃治・川本 和美

(1) 仮説

名古屋大学大学院生命農学研究科の協力のもと、東郷フィールド（附属農場）において、学びの杜特別講座「名古屋大学附属農場講演会・見学会」を開催した。講演会では、大学等で実際に研究を行っている研究者の方から、農学研究の最先端のお話を聴き、研究の意義や手法など研究体系を知るとともに、最新の研究成果と実生活の関わりについて学ぶことが目的である。さらに、研究者自身が語る研究の苦労や成果の喜びを知ることで、SS課題研究や総合人間科、生徒研究員制度などの場において、生徒の研究に対する意欲の向上が期待される。また見学会では、ウシへの給仕や多種多様なイネの観察などを通し、動物や植物に触れ、農学に興味をもつとともに、普段体験することのできない農学研究の現場について知ることを目的としている。



(2) 実践

- 日 時：10月28日（土）14:00～16:30
 講 師：近藤 始彦 先生（名古屋大学大学院生命農学研究科）
- 講演会概要：近年、イネ作においてコメの品質低下や不稔などの高温障害が問題視されている。一方で、温室効果ガスであるCO₂の増加が、光合成を促進し、コメの収量を増やすことが期待される。そこで、高温障害を軽減し、かつ高CO₂による収量増加効果を大きく発揮させるような、地球温暖化にうまく適応したイネ作りが今後の重要な課題となる。実際に高CO₂環境でイネ作を行ったFACE実験など最新の実験結果を交えながら、イネ作りの今後について考えた。
- 見学会概要：ウシへの給仕体験、被験動物であるヤギの観察、多種多様なイネやコメの比較・観察などを行った。

(3) 評価

今年度は中学1年生から高校3年生までの6学年計44名が参加し、過去最多の参加人数であった。参加した生徒は熱心に講演を聴き、記録用紙にメモを取っていた。講演後は多くの生徒がそれぞれの学習段階に応じて様々な質問を講演者に投げかけており、生徒の研究に対する興味の強さが伺えた。感想には「CO₂の増加が農業に良い影響を与えるとは全く知らなかった」、「自分のものの見方が広がり、さらに地球や農業について知りたいと思うようになった」など、新しい発見に驚きや喜びを感じているものが多く見られた。一方で、「品種改良との関係を調べようと思った」、「温暖化による作物への影響を自分でも調べてみたい」、「(遺伝子組み換えで)将来どのような食べ物ができるか不安だ」など講演内容から新たな課題や問題意識を見出すものも多く、今後の本校における探究活動につながることを期待される。また見学会では、講演会の内容と関連して「(様々な穂の形がある環境に適応するためにつくられていると思うと、人間の技術はさすがだなと感じた)」など、研究の成果を目で見て実感することができた。他にも、ウシの給餌体験から国産牛と和牛の違いに興味を持ち、後日調べ学習をした生徒もおり、全体を通し、非常に有意義なものとなった。 (文責 若山晃治)

